

令和元年6月11日現在

機関番号：11501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K04478

研究課題名(和文) 県民歌、市町村民歌 のデジタルアーカイブの構築と教材化の研究

研究課題名(英文) Research on the construction of digital archives and teaching materials of "prefectural and municipal songs."

研究代表者

佐川 馨 (Sagawa, Kaoru)

山形大学・地域教育文化学部・教授

研究者番号：40400519

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、市町村合併等で失われつつある<市町村民歌>や<県民歌>の楽譜及び関連資料をデジタルデータ化して保存・蓄積し、三つの実践を通して地域の音楽文化遺産の継承と、地域の音楽素材を活用した社会教育及び学校教育の充実に資することを目指した。

実践の第1は「市町村民歌、県民歌の楽譜及び関連資料のデジタルデータ化による 県民歌、市町村民歌デジタルアーカイブ の開設と運営」である。実践の第2は「実践第1の成果を活用した教材開発(音源制作、解説資料作成)と社会教育や学校教育への教材及び資料の提供」である。実践の第3は「開発した教材を活用した教員志望学生によるアウトリーチ・プログラムの開発と実践」である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は次の3点である。

県民歌、市町村民歌デジタルアーカイブ の開設と教材開発が、「地域の音楽素材」を活用した郷土学の推進をもたらす、地域の音楽文化遺産の継承と音楽文化振興が図られる。教員志望学生によるアウトリーチが、地域の音楽を媒介として大学と地域の結び付きを、これまで以上に深めることができる。市民に音楽教育の可能性と重要性を再認識させる場となるとともに、活動成果のフィードバックが大学の教員養成を補完する働きをもたらす。

研究成果の概要(英文)：This research aimed to preserve and stock the digitalized scores and related data of "prefectural and municipal songs" that go missing due to the merger of municipalities. It intended to inherit the local musical and cultural heritage through three practices. The research also attempted to contribute to the enhancement of social education and school education utilizing local music materials.

The first practice is to digitalize the scores of prefectural and municipal songs and associated information as a way to open and manage an archive of such music and data. The second practice is to develop teaching materials utilizing the results of the first practice, or to produce sound sources and prepare supplementary materials, and to provide teaching materials and information for social education and school education. The third practice is to explore and implement an outreach program by aspirant future teachers using the developed teaching materials.

研究分野：音楽科教育

キーワード：県民歌 市町村民歌 音楽教育 デジタルアーカイブ 地域素材

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

#### (1) 県民歌、市町村民歌の音楽文化遺産としての価値

筆者はこれまで「地域の音楽素材」の教材性に着目し、伝統音楽的素材（民謡、お囃子、わらべうたなど）、西洋音楽的素材（明治以降の地域関連の作曲家の音楽作品や著作など）、生涯音楽的素材（地域の特色ある文化施設や音楽活動、人材など）の三つに分類して教材開発をするとともに、開発した教材を活用した音楽科教員養成の試み（2012、『日本教育大学協会研究年報』第30集）、社会教育向け教材の制作（2012、『秋田が生んだ音、音楽 先人の音の遺産を辿る』）、市民向け解説付きコンサートの開催（2013、『明治ホールコンサート 松島舞の歌曲』ほか）などに取り組んできた。

一連の研究を通して、「地域の音楽素材」は親近感の高まりが学習意欲の高まりをもたらし、楽曲の魅力や価値を好意的に受け入れようとする態度生成を促進すること、また学習意欲の高まりが作品を媒介とした音楽的諸能力の向上をもたらすことなどが明らかとなった。

本研究では、これまでの成果を踏まえて<市町村民歌><県民歌>の教材性に着目した。<市町村民歌><県民歌>は、地域の歴史や自然、文化などを題材にして作られ、自治体ごとに制定された歌である。校歌と同様に集団への帰属意識や連帯感を高めるとともに自治体の広報的な役割を持つ歌である。

<市町村民歌><県民歌>の制定年代が古いものとしては、明治43（1910）年に制定された横浜市歌（森林太郎（鷗外）作詞、南能衛作曲）、翌44（1911）年の滋賀県坂田郡歌（作詞者不明、岡野貞一作曲）、大正5（1916）年に制定された東京市歌（高田耕甫作詞、山田耕筰作曲）、昭和5（1930）年に制定された秋田県民歌（倉田政嗣作詞、成田為三作曲）などがある。多くの場合、地域の人が長く愛唱していくための歌としての価値をもたせるために、地域に何らかの関わりのある作者によって作られ、音楽的にも芸術的にも高い価値をもつものが選定される。

しかし<市町村民歌><県民歌>は、歌詞の内容や曲想が時代にそぐわないなどの理由で歌われなくなったり、自治体の周年行事や地域の発展変容に合わせて作り直されたりすることが多い。また近年では、平成の市町村合併により新たな歌が作り直され、関連する楽譜や資料の保存方法は自治体により様々であり、廃棄や散逸が懸念される。

そこで本研究では、失われつつあるこれらの関連資料をデジタル化して、地域の音楽文化遺産として継承できるシステムを構築することを目指した。加えて、歌詞や音楽面から詳細な分析をすることによって、日本人が愛好してきた歌や時代ごとの流行していた音楽の諸相を跡付けることも期待できると考えた。

#### (2) 地域の音楽素材を活用したアウトリーチの可能性

「地域に開かれた大学」「地域とともに歩む大学」として地域社会との結び付きを深めていくことは、大学の今日的な責務の一つであるといえよう。大学教員の専門性に基づいた「知」と「技」を地域のために活用していくことはもちろんのこと、これからは教員と学生が一体となって学びの成果を社会に還元していく機会を持つことが大切である。

県民歌、市町村民歌などの「地域の音楽素材」を活用したアウトリーチは、大学が果たすべき地域貢献の役割とともに、音楽科教員養成における幅広い実践力の育成を補完する働きをもたらすと考える。学生にとっては、アウトリーチ活動に対する地域住民のフィードバックが学内における学びの再確認とその後の学修の改善へとつながっていくであろう。また地域住民にとっては、自分たちの郷土の音楽を活用した地域貢献であることへの親近感が、音楽教育の可能性と重要性を再認識させる場となるであろう。

### 2. 研究の目的

本研究は、市町村合併等で失われつつある<市町村民歌>や<県民歌>の楽譜及び関連資料をデジタルデータ化して保存・蓄積し、下記の三つの実践を通して地域の音楽文化遺産の継承と、地域の音楽素材を活用した社会教育及び学校教育の充実に資することを目的とした。

- ）<市町村民歌><県民歌>の楽譜及び関連資料のデジタルデータ化による 県民歌、市町村民歌デジタルアーカイブ の開設と運営
- ）上記を活用した教材開発（音源制作、解説資料作成）と社会教育や学校教育への教材及び資料の提供
- ）開発した教材を活用した教員志望学生によるアウトリーチ・プログラムの開発と実践

### 3. 研究の方法

本研究では、下記3点の研究に取り組んだ。

- ） 県民歌、市町村民歌デジタルアーカイブ の開設と運営

- ・ 楽譜や関連資料の映像は各自自治体に郵送で依頼し収集するとともに必要に応じて現地取材調査。
- ・ 社会教育、学校教材用映像、音源、解説資料を作成。
- ・ 作詞者、作曲家の他の作品や関連する資料を収集し、音源の無いものについてはレコーディングし、教材化。

以上を合わせて 県民歌、市町村民歌デジタルアーカイブ を開設し、Web 上からの教材・資料の検索と閲覧ができるようにした。

- ・ )上記 )を活用した社会教育カリキュラム、学校教育カリキュラムの開発と実践
- ・ 開発した教材を学部、大学院の授業において活用するための教員養成カリキュラムを開発。また、社会教育における教材の有効活用を目指したカリキュラムを開発。
- ・ 開発したカリキュラムに基づいて、教員養成及びの場からの地域の音楽文化遺産の継承と教材の有効性の検証を試みた。
- ・ )上記 )を活用した教員志望学生のアウトリーチ・プログラムの開発と実践
- ・ 制作した教材を活用して教員志望学生によるアウトリーチ・プログラムを開発実践。具体的には学校向けの鑑賞教室や市民向けの解説付きコンサートを開催。

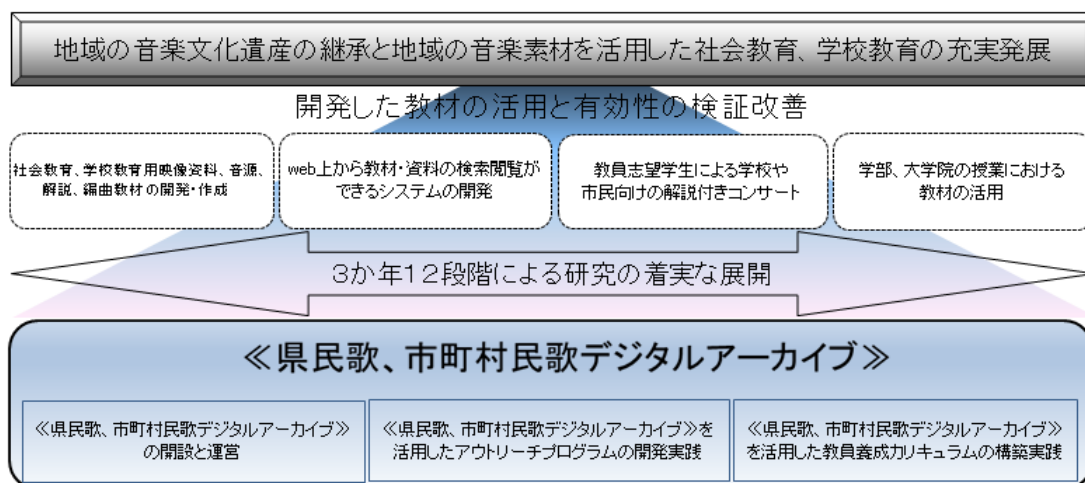
これらの研究計画のうち )については、年度末等の自治体の業務の繁忙期に重ならないように配慮するとともに、データの提供及びについても負担にならないようにした。

)については、学内の他の教員との連絡調整が必要となるため、早い段階からのカリキュラム構築と既存の授業内容との調整を図った。

)については、学生の教員志望の校種や専攻内容に配慮した内容とし、アウトリーチによる地域貢献が学生自身の実践力や職業意識の涵養につながるよう配慮した。

以上の取り組みが、県民歌及び市町村民歌、また関連する地域の音楽素材を媒介として 郷土の音楽文化遺産を継承し、 大学と地域の結びつきを深め、 教員養成と地域教育を結び付ける効果を生み出したものとする。

#### [研究の全体構想]



#### 4. 研究成果

本研究で得られた成果は下記のとおりである。

県民歌、市町村民歌デジタルアーカイブ の開設と教材開発による「地域の音楽知」の共有化と音楽を核とする郷土学習への貢献

「地域の音楽素材」を活用した教材開発と教員志望学生のアウトリーチを連動させた地域の音楽文化遺産継承

「地域の音楽素材」に着目した社会教育教材、学校教育教材の開発

歌詞や楽曲の分析を通して、これまでの唱歌教育研究や童謡研究とは異なる側面から地方における音楽教育史や洋楽受容を探求

#### 5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計4件)

佐川 馨、山形県民歌「最上川」制定の背景 教材開発のための覚書 、生涯音楽学習実践学、査読有、第3巻、2019、pp.8-28

佐川 馨、フィールドプロジェクトでつなぐ地域、人、音楽 アクティブ・ラーニングの視点に基づいて 、査読無、第2巻、2019、pp.16-25

佐川 馨、失われゆく県民歌、市町村民歌のデジタルアーカイブと教材化の研究(1) 大学院の授業における音楽文化遺産の試み 、生涯音楽学習実践学、査読有、第2巻、2018、pp.34-49

佐川 馨、音楽文化の理解を深めるための題材開発の試み 高校の音楽教科書を素材にして 、音楽科教員養成研究、査読無、第1巻、pp.5-25

〔学会発表〕(計2件)

「秋田が生んだ音、音楽 先人の音の遺産を辿る 」2017.11 秋田県立博物館

「二つの県民歌「秋田県民歌」「県民の歌」制定の背景を探る」2015.5 秋田県生涯学習センター

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

〔その他〕

○市民向けコンサート

「山形が生んだ音、音楽 真島俊夫の音楽 」2018年10月21日、山形大学文化ホール

「山形が生んだ音、音楽 紺野要吉の音楽 」2017年10月8日、山形大学文化ホール

「山形が生んだ音、音楽 佐藤敏直の音楽 」2016年10月1日、山形大学文化ホール

「山形が生んだ音、音楽 松島彝の音楽 」2015年10月10日、山形大学文化ホール

ホームページ等

[http://www.e.yamagata-u.ac.jp/~k\\_sagawa/](http://www.e.yamagata-u.ac.jp/~k_sagawa/)

6. 研究組織

単独